

北海道で漁師になろう 2

北海道漁業就業支援協議会

新米漁師です
私たち

将来は何でもできる漁師に！

とにかく大漁したい！

気絶するほど魅力的！

礼文島での漁師は夢でした



まざ、やつてみよう研修を！



平成23年の3月11日に未曾有の東日本大震災があったのは記憶に新しいところです。北海道沿岸も漁船、養殖施設等に相当な被害を受けました。とくに、東北地方沿岸は東北地方太平洋沖地震による大津波により壊滅的な被害を受け、マスコミでは連日大きな被害が報道され、地震、津波そして海の怖さが伝わってきました。地震後しばらくは、当協議会

宛への漁師になりたい人の問い合わせが減少しました。しかし、夏頃から問い合わせが通常のレベルにまで回復し、漁師になつてみたい人が潜在的にかなりいるとの思いが強りました。

この冊子を手にしている方は、職業としての漁師に興味がある、あるいは漁師になりたいと思っている人ではないでしょう。

か。そのような方たちのためにこの冊子があります。最初のこの見開きページには、長期の実地研修生に関する状況を図で紹介しました。

次のページ以降には、漁師の子弟ではない人たちが研修を通じて漁師になつた経緯を紹介しました。是非、参考にしていただきたいと思います。



長期の実地研修から漁師に

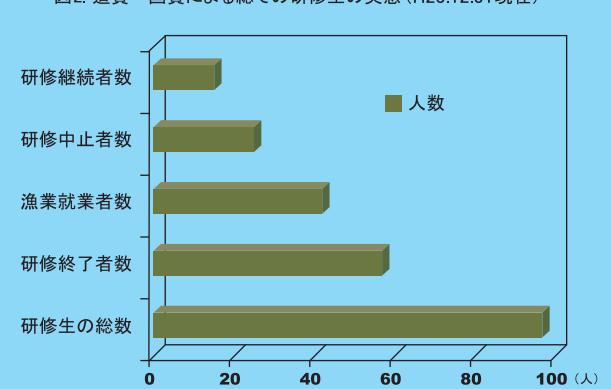
漁師の子弟ではない一般の人を対象とし、指導漁業者の下で行われる漁業就業のための長期実地研修は、北海道では平成11年度から行われるようになりました。最初は道の事業として行われ、平成18年度からは、国の事業としても行われるようになりました。これまでに（平成23年12月31日現在）、北海道では97名が研修に入りました。各漁協ごとの受け入れ漁協



図1. 北海道漁業就業支援協議会設立年度からこれまで(H23.12.31現在)の研修生受け入れ漁協



図2. 道費・国費による総ての研修生の実態(H23.12.31現在)



月31日現在)、北海道では97名が研修に入りました。各漁協ごとの受け入れ漁協は合併後の総数で表示)。最も多いのは寿都町漁協で19名、二番目は新星マリン漁協の15名、そして三番目は利尻漁協の13名です。これら三漁協は他の漁協よりもかなり多くの研修生を受け入れており、強い熱意と需要がある地区です。

残念ながら、97名中25名は研修中止となりましたが、57名は無事研修を修了し、その内の42名が現在漁師

として各地域で働いています(図2)。現在も研修を継続している15名を差し引いた82名を分母として計算すると、研修修了率は70%、漁業就業率は51%になります。一般の人がこの漁業という危険で厳しい職業に参入することを考慮すると、かなり高い率と言えます。先程述べましたように、42名がすでに立派な漁師としてあるいは新米漁師として活躍していますが、なかでも利尻島には9名の研修を経験した漁師がおり(図3)、新星マリン漁協や寿都町漁協にも多くのOBが活躍しています。さらに、

次ページからは最近漁師になった将来有望な若手を紹介しています。これから漁師になつてみたい方、漁師に興味がある方は是非本冊子を読んで、職業選択の参考にしていただきたいと思います。

各地域で多くの漁師が誕生することを期待しているところです。



五十嵐 俊さん

札文町香深村 札文島での漁師は 夢でした



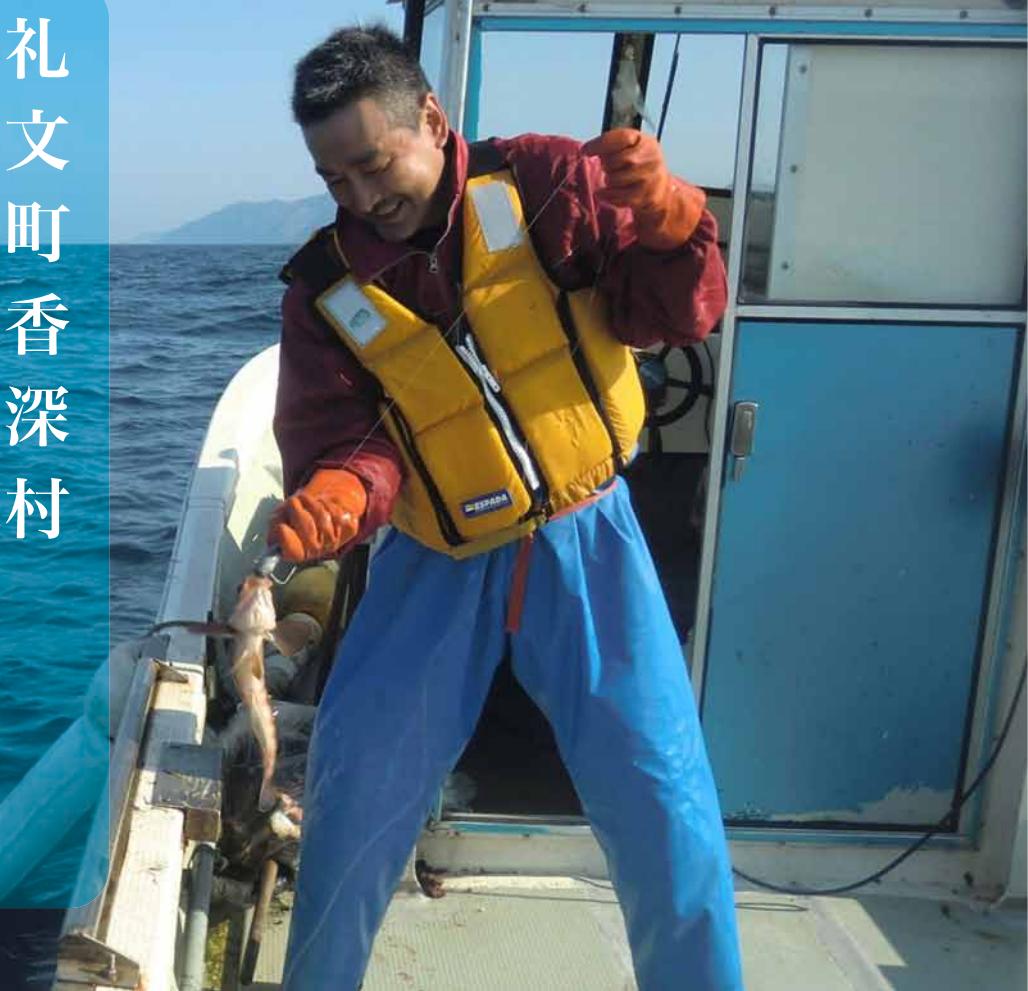
五十嵐俊さんは、平成22年2月に旭川市で行われた新規漁業就業支援フェアに強い意志を持って参加した。彼は漁師とは無縁の人生を歩んできており、最終学歴の大学では法律を学び、最初の就職先はクリーニング会社、その後縁あつて放送局のパートナリティ、イベントなどの司会業、パブの経営などを経験した。なぜ、漁業就業支援フェアに参加したのか。彼はことのいきさつを次のように話してくれた。

以前に札文島の天才漁師と札幌で呑む機会に恵まれた。札文島の美しい景観、豊かな天然資源、勇ましい漁士……。



導を希望する親方が参加しており、五十嵐さんとの話し合いは緊張のうちにも順調に進み、結果として一年間の国費による研修に入ることになった。親方は夏

その話が、山菜採りや釣り好きで、曾祖父が札文島の漁師だったという彼の脳裏に強烈に焼き付いた。それから漠然と札文島で漁師をやれたらという希望を持つようになつたが、「そんなことは絶対に無理」という思いもあり、日々の生活の中で漁師への思いは小さくなっていた。そのような時、札文島の新人漁師を取り上げたドキュメンタリー番組に彼の目は釘付けになつた。未経験の人間が漁師へと向かっていく姿、そして札文島では漁師を目指す者をさらに募集中しているという内容に、居ても立つても居られなくなつた。彼はあらゆる手段を使って漁師への道を模索した結果、インターネットで北海道漁業就業支援協議会が主催する新規漁業就業支援フェアのサイトに辿り着いた。「もしかしたら漁師になれるかも知れない、それも札文島で」。





五十嵐さんは昭和42年生まれの40歳代。漁師を一から始めるにはきつい年代だ。彼の年齢では技術の習得にも時間がかかることを自身自覚している。それでも持ち前の明るさ、心配りで漁師としての研修を乗り切つてきた。彼は、「ある時、雪がたくさん降り、近所の高齢漁師の除雪を手伝ったが、漁に出ると私よりも身軽に動き、たくさんの魚を獲るんだ」と笑っていた。また、あこがれの礼

彼の思いは杞憂に終わり、二ヶ月おいて6月から研修を再開できた。その後は順調に研修が進み、一年間の研修の中でコンブ養殖漁業の多くの技術や採介藻漁業のイロハを学んだ。

五十嵐さんは昭和42年生まれの40歳代。漁師を一から始めるにはきつい年代だ。彼の年齢では技術の習得にも時間がかかることを自身自覚している。それでも持ち前の明るさ、

彼の思いは杞憂に終わり、二ヶ月おいて6月から研修を再開できた。その後は順調に研修が進み、一年間の研修の中でコンブ養殖漁業の多くの技術や採介藻漁業のイロハを学んだ。

堀幹雄さん。コンブ養殖漁業のスペシャリストである。平成22年の3月から研修を始めたが、すぐに問題が起きた。父親が病氣で倒れたのだ。五十嵐さんは、「正直これで漁師になる夢はダメかも」と思つた。しかし、

文島周辺海域で漁をしていると「今でも信じられない気持ちになる。もちろん、幸せな気持ちがわき上がりてくる」とのこと。「漁師は私の天職」、「私の人生に漁師という部分が必要」とまで熱く語ってくれた。

近所はうるさいほど親切で、彼の家には人がしょっちゅう出入りしており、「ある時、帰宅したら近所の人のが家の中にいたこともある」と内緒で話してくれた。経済状況はあまり良くなく、拾いコンブ漁が頼りだが、将来には希望を持っていると力強い一言。今は准組合員で、平成24年の春には正組合員になる予定。平成23年の2月には2級小型船舶操縦士の資格を取り、現在譲り受けた磯舟を所有しているが「将来は四～五㌧型の船を手に入れ、採介藻漁業、タコ箱漁業あるいは一本釣りなどを思う存分行つてみたい」と語っていた。

しかし、漁師とは言つてもまだまだ未熟な五十嵐さんは、23年の8月から道費による研修を受け始めた。彼のあこがれのカリスマ漁師である中町勝さんは、偶然の積み重ねにより道費研修の指導親方。五十嵐さんは「自分のイメージする漁師にま



た一步近づいた」との思いがある。研修中に思いもよらない子宝に恵まれ、漁師への思いはさらに強くなっている。現在は親子三人暮らしの渥美咲きの漁師1年生。

松前町札前

気絶するほど魅力的！

熊木 正伸さん



熊木正伸さんは昭和58年生まれの28歳。函館生まれの函館育ち、地元の函館の専門学校を卒業後、東京の会社でシステムエンジニアとして働いていたが、小さい頃からの夢である漁師になることを心に秘めていた。

次第に膨らみ始め、漁師になることが現実的な夢へと変化していった。そのような時に、インターネットで全国漁業就業者確保育成センターが平成21年7月に開催する東京での漁業就業支援フェアを知り、勝手知ったる函館といふこともあり、会場の函館国際ホテルにまず行つてみようと思った。ここで、指導漁業者となる寺田敏廣さんとの運命的な出会いがあった。

親方の主な漁業はホッケの籠漁業とそれに付随するホッケの蓄養。祖父が漁師であつたことから、漁業に多少の知識があつたので、「珍しい漁業で生計を立てているのだな」と思い、興味が湧いてきた。この興味を



やらせたくないという思いなのか、漁師であつた祖父が強硬に反対したため、漁師になることを封印していた経緯があつた。

しかし、祖父の死をきっかけに漁師になる夢が

業就業支援協議会が平成22年2月に開催する函館市での漁業就業支援フェアを知り、勝手知ったる函館といふこともあり、会場の函館国際ホテルにまず行つてみようと思った。ここで、指導漁業者となる寺田敏廣さんとの運命的な出会いがあつた。



あるブースの漁業者に「今の職を辞めない方がいいよ」といわれたが、どうしても漁師になる夢をあきらめきれなかつた。

そのような時に、インターネットで北海道漁出発点として、現在も指導してくれ

てている寺田敏廣さんに師事し、現在に至つている。

成23年の3月に修了し、同年8月か



ら道費の長期実地研修を受けた。「これまでの研修で辛いと思ったことはなく、海にいるだけで幸せ」と感じ、厳しいながらも充足感のある研修生活を過ごしてきた。研修を受けた漁業種はホッケ籠漁業をはじめ、マグロ一本釣り漁業、採介藻漁業およびヤリイカ敷網漁業などであるが、研修期間の多くの部分をホッケ籠漁業と蓄養にあててきた。ホッケの籠を海に投入する時には、七〇個の籠を五分で流す必要があり、体力と技術の向上が課題とのこと。

平成23年の4月から准組合員になり、24年の4月には採介藻漁業などを

ができる正組合員の申請をする。最初の研修を修了した時には、親方が中古の磯舟をプレゼントしてもらいや、正組合員になった時にはその船を使つて採介藻漁業をする予定。平成22年11月には1級小型船舶操縦士を、23年1月には2級海上特殊無線技士の資格を取り、正組合員になった時の用意は万端だ。

親方や親方の家族、近所の人そして漁師仲間の人たちは彼に親切に接してくれ、彼は人間環境には恵まれていると感じている。また、病院や買い物など生活環境にも不満は

身の彼が伴侶を見つける環境として若干の疑問符がつくが、そのことに触れた時にはにかむ顔からは、そのようなことは今の彼の中ではまだ

大きな問題になつていないと感じた。

彼が思う自分の長所は「根気強いく、漁師生活を楽しんでいる。独身の彼が伴侶を見つける環境として若干の疑問符がつくが、そのことに触れた時にはにかむ顔からは、そのようなことは今の彼の中ではまだ大きな問題になつていないと感じた。

族として扱うと家族会議で決めたことである。今後、熊木さんが本物の漁師になることにより、寺田さんと熊木さんの本当の意味での二人三脚が始まる。



ある」と笑つて話していたのが印象的だ。彼自身、一人前になるには10年ぐらいかかると考えており、「その頃には五、六歳の漁船を取得して思う存分漁をしてみたい」と目を輝かせていた。



大学に入るため漁業と縁のない海なし県の奈良県から北海道に渡り、大学卒業後は水産系研究者を目指す人が多い大学院に進み、その後漁師を目指している人いる。興味深い経歴から新聞も取り上るほどに話題になっている、その人が山本靖弘さんである。

彼は昭和59年生まれの27歳、大阪生まれの奈良県育ち。魚や釣りが好きなこともあり、大学の学部は水産を選んだ。大学卒業後の就職先として民間会社を検討したが、「これだとと思うことができず、将来の進路を決めぬまま大学を卒業後大学院に進学した。大学院での野外調査と野外での人とのふれあいの中で、自然の中で働く職業に憧れるようになつた。その職業が『漁師』！」

そのような時、インターネットのホームページで北海道漁業就業支援協議会が開催する漁業就業支援フェアのことを知り、早速平成22年2月に行われた旭川市と函館市での両フェアに参加した。

両方に参加したのは「就職の選択肢を広げ



る」ためであり、結果として多くの漁業者の話を聞くことができた。魚介類養殖業は農業のイメージがあることから、獲る漁業に狙いを定め、結果として現在の指導親方の漁業種類や考え方惹かれて平成22年の3月から寿都町で国費による長期実地研修を始めた。

研修の初期は仕事の面でも体力的な面でも厳しいことが多く、なれるまでは辛かった。しかし、辛いのは3ヶ月ぐらいまでで、仕事のことを知り、体もなれてくると

徐々に「仕事が楽しい」と変わっていた。山本さんは、「仕事は一生の間にあまり変えるものではない」との考えを持



寿都町歌棄町
とにかく大漁したい！
山本 靖弘さん



つており、現在は『漁師』を一生の仕事と考えている。

寿都町での生活環境は良いところと悪いところがあるということだが、山本さんの話を聞いていると、悪いところが必ずしも悪いところではないようである。病院や買い物などの面では不便ではなく、経済状況は「ぼちぼち」と笑って答えてくれた。

山本さんは平成23年4月には漁協



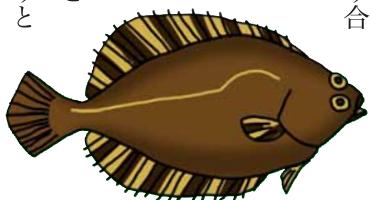
正組合員になり、特定の浅海漁業は自由にできる状況にある。中古の磯

舟を購入済みであり、ウニ漁については試運転済みのこと。春にはナマコやタコ漁業などにも挑戦したいとの希望を持っている。日曜日には磯舟で釣りを楽しんでいること

だが、地元の人は「漁師が休みの日にわざわざ釣りをするなんて?」と笑っているそうだ。現在流行の6次産業（魚介藻類の漁獲・生産だけでなく、加工、流通・販売にも漁業者が主体的に関わる産業）には興味なく、「もっともつと海のこと漁業のことを勉強して獲る漁業のことを知りたい」との抱負を語ってくれた。

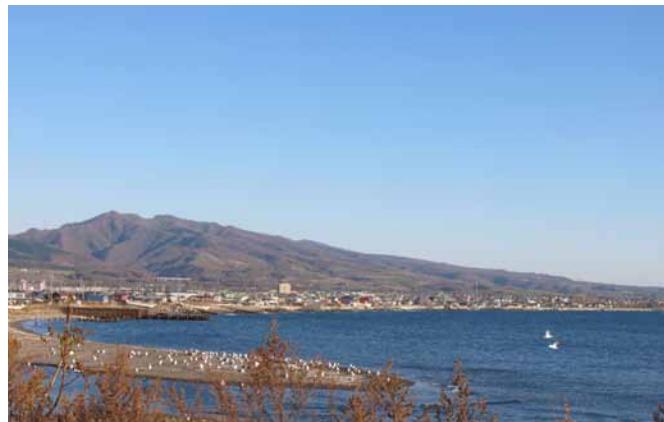
「漁村では女性と知り合いになる機会が圧倒的に少ないので?」と質問すると、「そうですね。でも僕は幸運にもある女性と知り合うことができました」と、はにかむことなく答えてくれた。地元の娘さんと良好なつきあいをしている

ようで、漁師の一家を構える将来をしつかりと見据えていた。



中山さんは札幌生まれの札幌育ちで、大きく職内容を変えて転職した一人だ。大学では漁師とはほど遠い教育学を学ぶ。大学院では臨床心理学を学び、その経験を生かして、福祉関連のNPO法人を五、六人で立ち上げた。しかし、経歴を見えてNPO法人での仕事も課題が見えてきて、30歳少し前から転職を考えようになつた。

農業や水産業などの一次産業に興味を持つようになった時、偶然全国漁業就業者確保育成センターのホー



伊達市西浜町 将来は 何でもできる漁師に！ 中山 英昭さん

研修に入ると、体力面で非常に辛世話をすることになつた。植漁業や定置網漁業を行つて現在の指導親方である杉本聰さんにお

ムページが目にとまり、関連のホームページにも訪れ、情報を収集した。

情報を収集するうちに、漁業にもいろいろな種類があり、養殖業は他の漁業と比べて安定していることを知つた。ある程度の知識を蓄えた後、

平成21年に大阪で開催された漁業就業支援フェアに参加し、結果として

北海道での国費による長期実地研修に結びついた。当然、安定性のある

養殖漁業ということで主にホタテ養

殖漁業や定置網漁業を行つて現

世話をすることになつた。



かつた。筋肉の文字通り「力」も足りなかつた。苦しいこと、楽しいことを語り合える友達もなかなかつくれないことも辛かつた。しかし、体力がつき、力もついてくると、自分が仕込んだホタテ種苗を商品として水揚げする時の喜びを知るようになった。今では「このまま漁業を続けていきたい」と思うようにさえなった。現在、親方、漁師仲間、近隣の人たちとの人間関係も良好であり、「生活環境は文句なく恵まれている」と話してくれた。彼は奥さんと子供の四人暮らしであり、買い物や医療環境に不便を感じていないようである。課題の住居は親方から中古の家を譲り受けることにより解決した。

中山さんは、平成21年の4月から全国漁業就業者確保育成センターによる実地研修を始めて六ヶ月経過後、北海道漁業就業支援協議会が研修を引き継ぎ、22年の3月で修了した。

その後、道費による研修を22年8月から12月まで行い、一人前の漁師になるため研鑽に励んだ。現在は指導



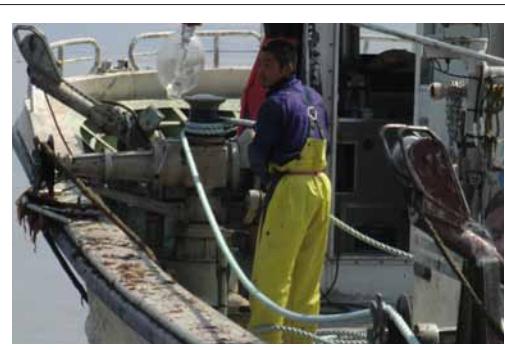
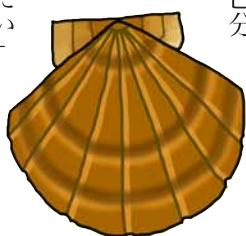
親方である杉本さんと一緒に漁業を行っているが、「将来は杉本さんが会社を興す時に共同経営の一翼を担いたい」との希望を持つている。22年10月には准組合員、そして23年2月には正組合員と順調に漁師への階段を上っている。

23年3月11日は忘れもない東北地方太平洋沖地震の発生した日だ。

伊達市の港は一時強水位が上昇し、五割近くの養殖施設が何らかの被害を受けた。中山さんや親方はその後の処理に多くの時間を要し、安定していると考えた養殖業にも、最近は不安定さを感じている。

将来は「養殖ホタテ漁業、ホタテ桁引き漁業以外、たとえばツブ籠漁業などにも挑戦したい」との希望を持っている。今の漁業技術は「まだまだ未熟」との自己分析を行つており、

「さらに技術を磨き、親方がいなくとも一人で何でもできるようになりたい」と未来を見つめている。



「北海道で漁師になろう！」サイト <http://h-suisankai.or.jp/enter.html>



携帯サイト <http://h-suisankai.or.jp/mobile>



お問い合わせ

北海道漁業就業支援協議会

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目
北海道水産ビル 社団法人 北海道水産会内
TEL(011)280-3007 FAX(011)280-3008
E-mail:fish10@h-suisankai.or.jp